

## 15・16世紀山陰地域の政治と流通

### 1. はじめに

本報告の課題は、文献史料に拠りながら、山陰地域出土の中世貿易陶磁群を歴史的に位置づけるための条件や背景について、検討することにある。はじめに、主たる関心の所在を述べておきたい。

関周一氏は、15世紀の西日本海において展開された日常的な交流を示す事例として、次のような事実を明らかにしている（関 2002）。まず、世宗18年（永享8年＝1436年）、蔚山波連巖等に漂着した対馬倭人太郎左衛門が、塩浦軍官に対して、商売のため石見国に向かう途中漂流したと説明したこと（『世宗実録』巻72）。端宗3年（享徳4年＝1455年）の老岐国源聞の書契に、石見国出身の「三甫羅酒毛」が、対馬島にて還俗し、自分の父母は朝鮮人であると詐称して朝鮮で回賜品を盗んだと記されていること（『魯山君日記』巻13）。また、成宗12年（文明13＝1481年）に全羅道を襲撃した「倭賊」22人が、対馬国伊奈郡守宗盛弘の管下に居住して石見国との商売を生業としていたこと（『成宗実録』巻132）。

関氏はこれらの事例について、「石見・対馬・朝鮮という地域で、対馬・石見国の人により、日常的な交易や掠奪が行われていることが想定できる」と述べている。今日からみれば「掠奪」はただの違法行為であるが、当時の商業取引の実態は、実際のところ、詐欺まがいの取引や海賊行為と見分けのつかない部分がかかなりの比重を占めていたと推測される。掠奪行為の背後には、同一主体によって営まれる日常的な交流を想定することができる。こうしたあり方は、強大な統一政権が成立しない限り、完全に断ち切られるようなものではないのではないか。そして、そのような商業取引を含む交流によってもたらされる文物の中には、何が含まれていたとしてもおかしくはないのではないか。

15世紀の大陸と山陰海岸との間に、関氏が紹介したような日常的な交流が存在したとすれば、列島社会の時代的・地域的特質はどのようにとらえることができるのか。こうした関心を持ちながら、15・16世紀における山陰地域の政治と流通を概観したい。

### 2. 海域の地勢的特質

中世日本海水運の構造と展開については、特に朝鮮半島・沿海州にも近い西日本海海域（朝鮮半島東南部沿岸・対馬・博多から、若狭国小浜などに至る海域）における実像とその展開過程が不鮮明であったが、井上寛司氏の研究によって基本的な事象や特徴が示され、荘園公領制の年貢輸送ルートを起点とする廻船ルートの形成過程が解明された（井上 1986・1991）。ただし、近年の考古学分野の著しい進展（石見銀山関連遺跡の調査、益田市の沖手遺跡・中須西原遺跡・中須東原遺跡をはじめとする益田川流域遺跡群の調査、大山寺僧坊跡遺跡の調査）により、新たな課題が次々と浮かび上がってきた。ルートとしてのみではとらえがたい、もっと多様で多元的な物流の存在を想定する必要があると考えられる。

中世の西日本海は、日本列島中央部の経済的・社会的・政治的構造の変化を規定していた側面がある。なぜならば、京都を含む西日本各地と大陸を結ぶ経路として、位置関係や

海流、対馬・見島・隠岐島など島嶼の存在など、すぐれた地理的条件を有していながら、天候や船舶技術発達過程における規制を受け、また陸路が優越する律令国家の交通体系にも強い影響を受け、制度的な条件や、広域経済からの影響を、独特な形で反映してきた歴史的経緯があるからである。

今、試みに、京都から直線距離で最も近い大陸はどこかということを考えてみると、朝鮮半島南東部に行き当たる。そして、京都と大陸を直線で結ぶ最短経路の中間地点には、島根半島が存在している。また、京都から見て、朝鮮半島のどの場所までの直線を引いても、いずれも山陰海岸を通過する。もちろん、現実の流通経路は、このような机上の最短ルートをとるような単純なものではないが、西日本海とは、日本列島の中で唯一、朝鮮半島と京都を結ぶライン上に位置する海域であったとも言えるのである。

西日本海とは、たとえば平安期日宋貿易の構造的特質（渡邊 2012）や、中世後期の大陸との通交関係、16 世紀の産銀輸出などが、日本列島の経済・社会に与えた影響について検討する際に、重要な鍵を握る海域であったと考えられる。

### 3. 政治勢力の趨勢

#### (1) 15世紀の対立軸

15 世紀の日本列島は、14 世紀とは異なり、守護職を世襲する家が増えた点に特徴がある。山陰海岸沿いの世襲守護家としては、大内氏（長門国守護）、京極氏（出雲・隠岐国守護）、山名惣領家（但馬国守護）と山名氏一族（因幡・伯耆・石見国守護）が知られ、その東側には一色氏（丹後・若狭国守護）や斯波氏（越前国守護）の分国が続いていた。このうち、若狭国守護は永享 12 年（1440）に一色氏から安芸武田氏へ、越前国守護は文明 3 年（1471）に斯波氏から朝倉氏へと、それぞれ交替した。丹後国守護は、文明元年（1469）以降、武田氏と一色氏が争奪を繰り返す。これらの諸国は、いずれも在京勢力が守護職をもつ「室町殿御分国」と位置づけられ（山田 2010）、守護は在京を原則としたが、大内氏については在国が基本であり、また 15 世紀後半以降は在国する守護が増えていく。

これらの守護勢力相互の関係は、応仁・文明の乱（1467～1477）において、西軍方の山名宗全・斯波義廉・一色義直・大内政弘と、東軍方の京極持清・武田信賢・朝倉孝景という、明瞭な対立軸となって顕在化した。島根半島周辺・隠岐島・若狭湾周辺は東軍細川方の守護分国であるのに対し、それ以外の山陰海岸の多くは西軍山名方の守護分国であったといえる。しかも、それぞれの分国内は一枚岩などではなく、東西両陣営に属する守護家同族や国人領主たちが相争う構図が展開された。特に石見国は、吉見氏・益田氏・三隅氏・周布氏・福屋氏・小笠原氏・佐波氏・高橋氏などの諸領主たちが、自立的に割拠し、次第に領主間協約の締結による紛争解決が実質的な秩序維持に大きな役割を果たすようになるとともに、邇摩郡を分郡支配した大内氏との結びつきを深めていく領主が多かった。

山陽道側の安芸国では、15 世紀中頃から 1 世紀近くにおよぶ大内氏と安芸武田氏の戦争が始まるが（河村 2010）、安芸武田氏が若狭国守護職を兼帯していたことが示すように、この抗争は山陰地域と無関係ではなかった。応仁・文明の乱で安芸武田氏は分裂し、やがて庶流の武田元繁が安芸国を本拠に独立する（そのためこれ以降、本流の武田氏を若狭武田氏と呼称する）が、元繁の跡を継いだ武田光和は若狭武田氏（元光）の後見を仰ぐなど、天文 10 年（1541）に安芸武田氏が滅亡するまで、若狭武田氏との関係は維持され

たものと思われる。

このように、15世紀における有力守護家の関係は、大きく見れば一つの対立軸に集約され、戦争状態に至らなくても敵対的な関係が潜在的に存在したところに、大きな特徴がある。15世紀の山陰道方面においては、大内氏・山名氏の勢力が多数の国々の守護職を確保する一方、京極氏・武田氏の分国が山陰海岸の中央部と東側の要衝（美保関・隠岐と小浜）を擁する場所に位置したことにより、両勢力相拮抗する状態が長く続いたと理解することができる。

## （2）対立軸の拡散・多極化

武田氏の例が示すように、応仁・文明の乱以降、各国における守護家を二分した分裂抗争は激しさを増した。特に山名氏にとって、山名惣領家の山名持豊（宗全）と、伯耆国守護家（伯耆山名氏）の山名教之が、相次いで没した文明5年（1473）は、大きな分岐点であったと考えられる。山名惣領家の本拠但馬国では、山名政豊・俊豊父子の対立が、垣屋・太田垣・八木・田結庄氏など有力な国内勢力の自立を助長した。伯耆国では、但馬国山名政豊らが支持した山名政之・尚之と、播磨国赤松政則らが支持した山名元之が抗争を繰り広げ、また1510～20年代には山名澄之が尼子経久の支援を受けながら伯耆国内の反対勢力と攻防を繰り返した。その過程を通じて、尼子氏は伯耆国西部を勢力下におさめ、1540年前半の一時期には、因幡国守護の山名誠通（改名して久通）も尼子氏に属するに至っている（岡村 2010）。1530～40年代における尼子氏の拡大は、山名惣領家に従う山陰地域の山名氏方諸勢力にとって、きわめて大きな脅威となったことがうかがわれる。

京極氏の出雲国支配を引き継いだ尼子氏は、1510年代から伯耆・備中・備後・石見など隣国の抗争に介入しはじめる。また安芸武田氏とは、天文10年（1541）に同氏が滅亡するまで、終始一貫して強固な同盟関係を維持した。永正14年（1517）に、大内義興の石見国守護職就任に反対する経久が前任守護代に合力するとの風聞が流れたように、尼子氏はこの頃から明確な形で大内氏と対立しはじめた（「益田家文書」『大日本古文書』275）。さらに、大永3年（1523）に経久が安芸国東西条鏡山城を攻略し、石見国へ侵攻したことは、大内氏に対する本格的な戦争の開始を意味していた。その一方で、この時期、山名惣領家（山名誠豊）と尼子経久との関係はまだ良好であった（「高洲家文書」）。

しかし、大内氏の反撃によって大永5年に安芸国内諸領主が反尼子方へ転じると、翌大永6年には備後国守護でもある山名誠豊は尼子氏との敵対を表明し、尼子氏は備後国北部すらほとんど足を踏み入れることのできない状況となった。山陰地域の主要な勢力は、大内義興・山名誠豊が、尼子経久を包囲するような形勢を成し、安芸武田光和やその後見的立場の若狭武田元光が尼子氏とつながる対立の構図を、想定することができる。さらに、享禄3年（1530）には、尼子経久の三男塩治興久が叛旗を翻し、出雲国内の主要な国衆（三沢氏・多賀氏）・寺社（杵築大社・鱒淵寺）がこれに与同した。大永・享禄年間（1521～1532）の尼子経久は、大内氏に対抗する勢力であることの誇示を試みたものの、全体的にみれば劣勢もしくは危機的な状況にあり、当時の尼子氏による領国支配の内実をうかがわせている。

### (3) 大内氏・尼子氏の盛衰と毛利氏

これに対して、1530～1540年代の尼子氏は、急激な拡大を遂げて、大内氏に対抗し、中国地方は二大勢力相拮抗する状況となった（島根県古代文化センター 2013）。

大内氏・毛利氏の支援によって塩冶氏叛乱を切り抜けた尼子経久は、天文元年（1532）に美作国へ侵攻し、美作国内（三浦氏等）と伯耆東部（南条氏等）の諸勢力と戦い、天文5年に備後国山内氏を服属させると、それ以後、備中・美作・播磨国方面や、備後・安芸国方面に向けた積極的な遠征を繰り返していく。その結果、1540年前後の中国地方では、尼子氏が大内氏に拮抗するほどの勢力を持つに至った。この時期は、大内義隆と結ぶ幕府管領細川晴元が、尼子氏の「退治」を命じ、これに六角定頼・山名祐豊・赤松晴政・土佐一条氏らが連携したのに対し、尼子氏は、畠山植長ら畿内の反晴元勢力と結び、安芸武田氏・若狭武田氏・因幡山名氏・伊予河野氏・土佐香宗我部氏らと同盟・連携しながら、大内氏麾下の毛利氏を攻撃した（郡山合戦）。二大勢力の拮抗は、一時的にはあれ、中国・四国・畿内におよぶ広範囲に大きな影響をおよぼしたのである。

しかし、1540年代に入ると、尼子氏は郡山合戦に大敗北を喫し、大内氏も出雲国遠征に失敗して敗走したため、双方ともに影響力を次第に後退させていく。大内義隆が重臣陶隆房の叛乱によって自害した翌年にあたる天文21年（1552）は、京都において、細川晴元の失脚と、細川氏綱による細川京兆家家督継承によって、三好長慶政権が確立し、一貫して氏綱方（＝反晴元方）の立場をとってきた尼子晴久が、8ヶ国にもおよぶ守護職や相伴衆の地位を獲得した年である。それらの守護職のなかには、出雲・隠岐・伯耆・因幡国守護職が含まれている。ただしそれは、あくまでも既存の職制秩序や家格秩序あるいは栄典の問題であって、実質的な分国支配の進展を意味するものではない。尼子氏は、むしろこれ以降衰退の過程をたどるからである。結局、大内氏は毛利氏によって弘治3年（1557）に滅ぼされ、尼子氏も永禄9年（1566）に本拠の富田城を開城して毛利氏に降伏した。

毛利氏による山陰支配は、因幡国以東にはなかなかおよばず、特に永禄12年～元亀2年（1569～1571）は、尼子勝久・山中鹿介らが主導した尼子氏再興戦により、出雲・伯耆両国が再び戦場となった。毛利氏は、但馬国山名祐豊や因幡国山名豊国と敵対関係にあり、また豊後国大友宗麟・備前国浦上宗景・美作国三浦貞広・伊予国能島村上氏らと対立していた。さらに、天正年間前半の織田氏との戦争では、天正7年（1589）に東伯耆の南条元統が織田方に転じ、天正9年には鳥取城が落城するなど、伯耆国西部までを確保するのみとなった。天正10年の本能寺の変により、ようやく羽柴秀吉と和睦し、最終的には伯耆国西部以西が、豊臣大名毛利氏の支配領域となった。ただしこれにより、ひとまず西日本海沿岸地域が直接の戦場となる時代は終わりを告げた。

以上のように、15～16世紀の西日本海沿岸地域を大観するならば、ほぼ一貫して敵対的陣営同士の境界線が複雑かつ可変的に複数存在し、天正年間前半に至るまで、それらが解消されることはなかったと考えられる。このことは、この海域の交流・物流に、どのような影響をおよぼしたと言えるだろうか。次に、その点を論じたい。

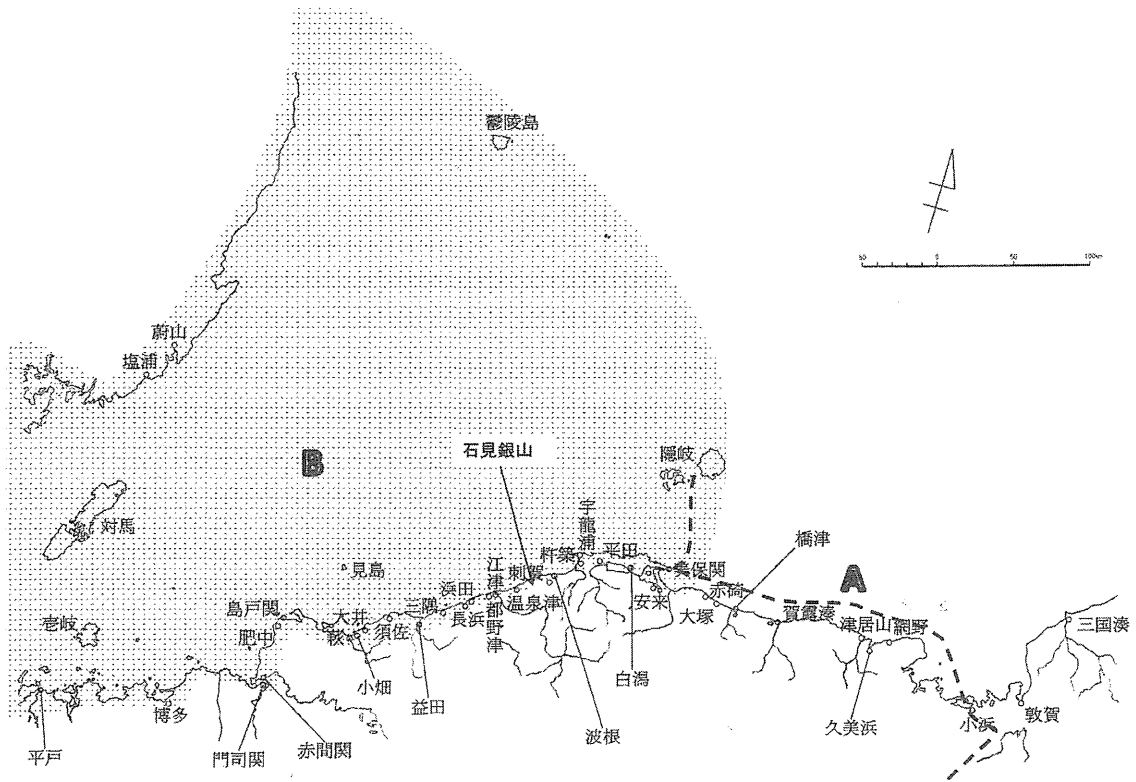


図1 15・16世紀の西日本海海域

#### 4. 海域の変容と京都

##### (1) 中世廻船ルートの開

網野善彦氏が指摘した鎌倉期以来の日本海廻船ルートの発展（網野 1984）は、14～15世紀にかけて、さらに進展した可能性が高い。

小浜に近い若狭国大飯郡日引（福井県高浜町）周辺を原産地とする日引石製石造物は、14世紀後半～15世紀前半を中心に、五島列島や薩摩半島、さらには北東日本海域に至る広範囲に伝存するとの指摘がある。それらは、既製品として販売された可能性が高いことが指摘されている（今岡 2001）。仮にそのすべてが同一産地の石材ではなかったとしても、規格の類似性や、類似の性質の石材が採用されたことの意味は重要であると思われる。これだけの範囲に商品としての若狭国産（あるいはそれに類似する石材を用いた）石製品が運ばれた理由は、中世前期から形成されはじめた廻船ルートの存在と、何よりも大消費地である京都への物流を担う基幹的港湾として、小浜をはじめとする若狭湾周辺が特に重要な役割を果たしたためではないかと思われる。

たとえば、文明2年（1470）4月26日、出雲国守護の京極持清が、守護代の尼子清貞に宛てて、「隠州所々廻舟、美保関役事、不致其沙汰、至于舟者、如先々、於若州小浜、可有懸沙汰候」と述べており、「隠州所々廻船」の美保関役について、未納の船については従来通り若州小浜において徴収せよと命じている（「佐々木文書」『出雲尼子史料集』36）。隠岐廻船にとって美保関と小浜に寄港することが大きな意味をもっていたこと、京極氏が小浜において未納の船を特定できる可能性があったこと、を示している。そのような条件のなかには、先に触れた若狭武田氏との結びつきがあった可能性が高い。これらの事実は、

中世前期から展開した廻船ルートのあり方をよく示すとともに、美保関役の徴収が容易ではないほどに、様々な船舶が多数・頻繁に寄港していたことをうかがわせている。

## （2）14～15世紀の西日本海西部海域（図1のB）

応永27年（1420）、朝鮮使節の宋希璟が持参した朝鮮国書には、出雲国安来に朝鮮人70余戸が存在すると記されており、それに対する室町幕府からの回答は、生存者はなく子孫も帰国を望んでいないという内容であった（『世宗実録』巻7）。伝聞情報や政治的な発言にすぎないので、いずれも事実関係は不明であるが、これ以前から山陰海岸と朝鮮半島の人々に少なからぬ接点があったことをうかがわせるものである。このことは、上述のような廻船ルートの発展とは別に、14～15世紀の西日本海西部海域において、交流・物流の様相が大きく変化した可能性を示している（長谷川 2013b）。

その前提には、12世紀前後以来、博多と石見国西部との様々な結びつきがあった可能性が高く、沖手遺跡・中須東原遺跡に見られる貿易陶磁はそのことを示すものではないかと思われる（註1）。さらに、14世紀の足利直冬勢力の盛衰や前期倭寇の横行、15世紀における朝鮮王朝と周布氏をはじめとする山陰海岸沿い諸領主との通交、応仁・文明の乱など、14～15世紀の政治的・軍事的・経済的あるいは外交上の新たな現象が、様々な形で条件・契機・原因を作りだしたことにより、この海域は多元的・広域的・日常的な交流・物流が展開する時代を迎えたと推測される（長谷川 2013b）。それは、日引石製（あるいはそれを摸した）石造物が増加したことからもうかがえるように、旧来の廻船ルートをもさらに活性化させたと考えられる。この時代における船舶構造や航海術の展開、それにとともなう港湾機能の拡大も、重要な条件となった可能性が高い。冒頭に挙げたような日常的交流の事例は、おそらくそのごく一部を示すものと考えられる。中須東原遺跡・中須西原遺跡から、朝鮮王朝陶磁を含む15世紀を中心とする貿易陶磁が大量に出土する背景には、そのような海域の変容が影響をおよぼした可能性を想定できる。

もちろん、明・朝鮮王朝による強固な貿易管理の意志は明瞭であるので、自由航行が是認されるはずのない体制であったことは言うまでもない。しかし、海域の実態が貿易管理体制から次第に乖離していったことこそ、やがて「偽使」や「倭寇」などが表面化するに至る最大の要因であると考えられる。日本列島の諸領主による朝鮮通交は直接的なものとは言えず、対馬・博多はもとより西日本海の諸勢力による日常的交流なくしては、実現困難なものであった可能性が高い。

## （3）16世紀前半の山陰と京都

注意すべきことは、この時代に至っても、京都と山陰地域のつながりが薄らいだとは考えられないことである。『実隆公記』永正8年（1511）正月28日条に「雲龍院来臨、雲州横田庄返報到来、割符五荷到来云々、珍重雲州海苔被携之、賞翫」と記されているように、出雲国内からの送金に為替が使用されるような仕組みは、日常的で緊密な信用関係がなければ維持しえないものである。また、京都から商品を運ぶ商人たちの活動について語った尼子経久の言葉も、興味深い。

雲州ノ太守ノ尼子ノ伊予ノ守ハ、アキ人ハテウホウナソ、田舎テ京ノホシイ物ヲイナカラ得ル事ハスクレタ事ソ、アキ人ハスコシノ料ヲトラウドテ、メコニモソワイデトライ大事ハルノミチヲ下ルソ、ウンチンタカウカイト、結句ワルウスレバ山タチナドニアウテ、京カラ以テ下ル物ヲトラレ、ワルウスレハコロサルソ、此ヲヨウサンヨウスレハ、京デ百セウス物ヲハ、遠国デハ壱貫ニカワウス事チャトイワレタソ、

これは、五山高僧の惟高妙安（1480～1567）が著した『玉塵抄』巻26の一節である。妙安は、永正10年（1513）より30年近くにわたって伯耆・出雲に滞在し、尼子氏関係者とも親密な交流をもったので、その記述は信憑性が高いものと思われる。

妙安がことさらにこうした記述を残したのは、経久の商業観に興味をひかれたことによるものと思われる。経久が、当時の商人たちの活動の特徴や意味を思考し、きわめて重要視していたことを示している。特に注目されるのは、経久が、京都でしか手に入らない商品について、明確な意志をもって希求していたこと、それは希少性とリスク（高額な運賃、山賊との遭遇など）を勘案すれば京都の10倍の値段であっても購入すべき価値あるものと考えていたらしいことである。妙安の記述による限り、経久のような認識は当時において決して当たり前のことではなかったようである。ただし、一定程度以上の財力を必要とした点に、留意が必要である。

おそらく15・16世紀における島根半島周辺の最大の特徴は、京都とのつながりに不可欠な小浜—美保関間を始めとする廻船ルート（図1のA）や出雲街道など陸路の幹線ルートと、特に14世紀以降に朝鮮半島・対馬・博多と密接な日常的交流が展開しはじめた西日本海西部海域（図1のB）との、双方の結節点に位置した点にある。尼子氏が、若狭武田氏とも連携しながら、島根半島周辺を中心的な基盤としたことが、16世紀前半における尼子氏拡大の条件になった可能性がある。

#### （4）石見銀山の隆盛

16世紀後半になると、西日本海海域（山陰海岸）の流通構造は、16世紀前半と全く異なる別世界のような様相を呈したと思われる。

おそらく大永7年（1527）のことと思われるが、博多商人の神屋寿禎によって、石見銀山が再発見されたと伝えられている。1540年代以降になると、銀需要が高まる明や朝鮮に向けて、押しとどめがたい銀の流れを生み出した。銀山開発はやがて日本列島各地に広がり、南米大陸の銀鉱山とともに、16世紀後半の世界はまさに「シルバーラッシュ」（本多2015）の時代を迎えていた。その結果、16世紀後半の石見銀山は山陰地域を代表するような巨大な都市へと変貌を遂げ、鉱物資源を生み出すのみならず、膨大な物資と遠隔地からの人々を吸収する一大消費地へと転換した。

天正3年（1575）6月、伊勢参詣からの帰路に山陰海岸を通過した島津家久は、同24日に石見銀山に宿泊すると、26日には西田を通過して温泉津に至り宿泊、27日夜に出船して28日の午後に浜田に到着している。その後12日間にわたって風待ちのため浜田に留まり、7月10日に出船、海路直行して同12日肥前国平戸に到着している。注目されるのは、石見銀山に宿泊した夜以降、浜田滞在中にいたるまで、加治木・肝付・伊集院・喜入・秋目・東郷・白羽・入来・京泊・泊・鹿児島など薩摩半島周辺の大勢の武家・船衆・町衆

が、家久の許を次々に訪れていることである（東京大学史料編纂所蔵「中務大輔家久公御上京日記」）。

文禄3年（1594）3月、薩摩国の廻国聖である堀之内日限坊の一行は、山陰海岸沿いを西から東へ歩いて移動する途中、浜田に一日逗留した。日限坊は、この時の様子を「彼壺所にてさつま衆にあひ、たかひにすゝお持せ色々のひきて物を取替、一日のなくさみに候」と記している（栗林 2014）。16世紀後半の石見国海岸部には、おそらく日常的に南九州や南海の船が着岸していたことをうかがわせている。

次の史料は、永禄6年（1563）5月29日尼子義久袖判奉行人連署奉書（「日御碕神社文書」『大社町史史料編』1505）の一部であるが、当時における島根半島周辺の状況を示すものの一つである。

- 一因州・但州船、如近年之、通役其外諸役等政光（小野）可被仰付事、
- 一北国舟勘過料、其外諸役等之儀可為同前事、  
付、北国舟問職之事、是又可有御計事、
- 一唐船着岸之時者、被得御意、政光与有御相談、諸役等可被仰付事、  
付、唐物役之儀、是又政光可有御進退事、

宇龍浦は、島根半島西端の港であるが、永禄年間の初頭頃から、因幡国・但馬国の船や、北国船（北東日本海海域の船）、さらには唐船（ジャンク）までもが、新たに着津する状況となっていた。こうした現象は宇龍浦に限られるものではなく、同じ頃、毛利元就によって派遣され杵築（杵築大社門前町）に滞在していた福井景吉も、数多くの北国船が着岸していることを報告している（長谷川 2013a）。

また、唐船着岸時の課役として「諸役等」や「唐物役」があったことが知られる。「唐物役」は、舶来品の中でも、特定可能な高価で高級な輸入品の売買取引への課税ではないかと推測される。これが唐船「諸役」に含まれるのかどうかは定かでないところがあるものの、尼子氏は、「唐物役」をそれ以外と区別して、御崎社（検校小野政光）が徴収してよいと記している。「諸役」のなかに、入港・荷揚・取引のいずれに関わる課税が含まれているかは不明であるものの、その取立については尼子氏へ報告し相談してから徴収するように指示している。この「諸役」のなかには、「唐物」以外の一般の商品の取引に課す課税が含まれていても不思議ではなく、むしろ尼子氏はそちらの方に関心を示していることが知られる。

このように、16世紀後半の島根半島周辺から石見海岸にかけての海域には、従来とは異なる他海域の船が頻繁に現れ始めたことが知られる。これらは、いずれも石見銀山隆盛期の新たな現象であったと推測される。出雲国富田において他所に優越する朝鮮王朝陶磁が見られるのは、白磁が多いことをふまえるならば、このような時代状況のなかで理解する必要があるのではないかとと思われる。

この時期の石見銀山は、単に技術者が集住して生産・搬出を担うような作業場であったのではなく、想像を越えるような遠隔地の大商人を含む諸商人や、生活・流通全般に多様な側面に関わる人々が暮らす都市であったと考えられる。もともと博多商人によって発見されたように、大内氏時代以来、石見銀山は博多とのつながりが深いが、16世紀後半の



史料は、和泉・摂津・備中をはじめとする瀬戸内海地域との多彩な結びつきを物語っている（長谷川 2012）。毛利氏時代末期以降に銀山役人として活躍した吉岡氏が堺出身であった（松岡 2002）ほか、銀山に居住した備中国連島の三宅氏は、かつて南海貿易を試みた三宅国秀と同じ家と思われ、堺の三宅氏とも同族であったとされている。この時期の山陰地域は、博多や京都はもちろんのこと、堺の関係者の手を経て、様々な物資が流れ込む十二分な条件が揃っていた。

また、尼子氏滅亡後まもない永禄 10 年（1567）4 月、池坊専栄は、石見銀山において「和泉堺甲小路之芝築地弥右衛門尉」に立花の口伝を伝授した（九州大学檜垣文庫資料所蔵「池坊専栄立花伝書」『新修福岡市史 資料編中世 1』）。また、永禄 12 年に島根県邑南町阿須那の賀茂神社所蔵絵馬の製作を狩野秀頼に依頼したのは、石見銀山代官の生田就光であり、秀頼はその 3 ヶ月前にも石見銀山昆布山谷の長楽寺の厨子に絵を描いているので、当時、秀頼が石見銀山に滞在していた可能性も否定できない（長谷川 2014・2015）。石見銀山をめざす人々の流れが、京・堺・博多を問わず、きわめて広範囲におよんだことをうかがわせている。彼らが持ち込んだり入手した生活雑器や花器等の諸道具が何であったかは不明であるが、貿易陶磁が含まれていたとしても不思議ではない。

#### （5）16世紀後半の山陰と京都

ここで注目しておく必要があるのは、山陰海岸の程近くに求心性の高い新たな物流拠点が出現し、京都から文化人までもが来訪し、旧来とは異なる人とモノの流れが渦巻く時代であるにもかかわらず、戦乱の激化による荒廃期を経た 16 世紀後半の京都は、依然として、そこでしか入手困難なものを送り出す力を持っていたということである。

たとえば、天正 11 年（1583）に焼失した出雲国意宇郡の神魂社（伊弉冉社）を再建する際に、杵築大社国造北島久孝は、神魂社別火の秋上久国に対して「京都へ支度之事、失念なく可被申事専一候」と述べている（「秋上家文書」『大社町史』2056）。

また、文禄年間（1592～96）の出雲国神門郡の日御崎社遷宮に際して、毛利氏重臣の佐世元嘉は、日御崎社に対して、「御入目方并ニ御出立装束社官衆迄之諸道具こま／＼御付立候て、急度高市（高橋慶信）所迄可被仰越候、京都へ詔候ハて不叶物之儀者、頓ニ詔可申候、又爰元にて調物之事者可申付候」と述べている（「日御崎神社文書」『大社町史』2382）。この遷宮において京都で調達しなければ入手できなかった「詔物」の内容については、「唐錦三巻」があったこと（「日御崎神社文書」『大社町史』2420）しか確認できないが、「諸道具」の内の何が京都で調達されたのか、興味深いところである。

以上、15～16 世紀における西日本海海域における、京都や大陸との関連性を示す事例を取り上げてきた。京都への唐物流入の優位性は 15 世紀前半までの現象である（関 2015）し、応仁・文明の乱以降の京都は、従来に比して、巨大な消費地としての物流の求心性を、相対的に後退させたと考えられる。日引石製石造物が同時期以降減少していくことは、消費地としての京都の変容が、日本海海域と若狭湾を介した京都への物流を変えていった可能性をうかがわせている。にもかかわらず、15・16 世紀を通して、京都でしか供給できないものが存在し続けた事実は重要である。

しかし、西日本海海域を介した直接的な交流は、12 世紀前後より、博多とのつながりによって人・モノの流れが顕在化したのではないかと思われる石見国西部にはじまり、14

～ 15 世紀において、朝鮮王朝との通交にもその片鱗をみせた日常的交流・物流が広く展開し、さらには 16 世紀の石見産銀の流出が他海域の船舶や列島各地の人々を数多く誘引し、物流の規模と範囲を飛躍的に拡大させたように、中世を通じて確実に深められていったと考えられる。京都との関係は、時とともに限定され、その一部分を占めるにいたった可能性が高い。

## 5. おわりに～物流の担い手と領主層の関係、富田川河床遺跡の位置づけ、史料の問題～

### (1) 政治権力と流通

政治的な主導権の所在が、物流にも様々な影響を与えた可能性を想定することは、当然必要なことである。15 世紀～ 16 世紀前半の西日本海沿岸部にみられた守護や広域的権力の様々な対立軸は、物流を制約する要因であるかのようにも見えるからである。

日本海ルートは、応仁・文明の乱によって活況を呈したという見方がある。そのことを否定することはできないが、戦争のみが要因であると特定できないほど戦乱の展開は広範囲におよんだのであり、特に西日本海海域においては、14 世紀後半以降の朝鮮半島・大陸との交流や、船舶航海技術の変化、それにとまなう港町の発展が、すでに直接的ルートによる最短経路の活用を促していた可能性を、より重視すべきではないかと思われる。山陰地域とその重要拠点もまた、戦場の一つであることに変わりはないのであり、戦乱の危険を避けるために生じた現象であるとは特定できない、という意味である。

15 世紀の周布氏のように、領主自らが主体となって行われた対朝鮮通交についても、周布氏の使節が直接朝鮮王朝に出向くことは、必ずしも必要ではなく、実質的には対馬・博多の商人たち、そしておそらくは石見国内の船持層や商人たちの力によるところが大きかった。

また、15 世紀の守護・守護代のほとんどは、分国を安定的かつ強力で管理しえたとはいえず、とりわけ流通の結節点ほど管理の難しいものはなかったと推測される。既述のように、15 世紀後半の出雲国守護京極氏は、「美保関役」の未進に特別な対応を迫られている。港や町などの流通の結節点は、強力な軍事的・経済的支配がその「発展」を阻害する可能性を内包しているところに大きな特徴があると考えられ、それは、16 世紀の大内氏・尼子氏・毛利氏においても基本的に変わることはなかった。戦国期大名権力の流通政策は、財政的な目的を除けば、「混乱」の回避と秩序の回復・維持に主眼があったのであり、またその諸政策は実効性をもちにくかった。瀬戸内海の秩序維持に、海賊衆の力が必要とされた所以である。

政治的な実効勢力の帰趨が、流通構造の変化に反映された側面は、かなり限定されていたのではないかというのが、現時点での一応の結論である。



富田城山頂より北東方向の遠望

## (2) 尼子氏の盛衰と富田川河床遺跡

その一方で、天文年間（1532～1555）に尼子氏が急激な拡大を遂げ、それまで対立的な関係の守護勢力同士が割拠していた西日本海沿岸諸国に強い影響をおよぼしたことは、その本拠が所在し、山陰海岸の中央部にあたる島根半島周辺（とりわけ美保関・富田）に、商人たちが集まりやすく、物流拠点を生じやすい条件をつくり出した側面があると考えられる。尼子氏の本拠であった月山富田城跡は、標高こそ200mに満たないが、天候さえよければ能義平野、中海、弓ヶ浜半島、美保関、美保湾、島根半島東端を、一望の下に見渡すことができる（写真参照）（註2）。月山富田城とその城下（富田川河床遺跡の所在地）は、たしかに内陸部の軍事的・政治的拠点ではあったが、同時に日本海水運・内海水運・河川水運の拠点としての側面を併せ持っていたと言っても過言ではない。

また、その当時の尼子氏が、京都との結びつきを重視した点も見逃せない。尼子氏が京都と最も強く結びついたのは、天文年間（1532～1555）末期のことであり、細川氏綱への支援や、三好政権の確立により、尼子氏の京都における名声は、一時的に最も高まった。当時の当主は晴久（尼子経久の嫡孫）であったが、その人物像については、次のような点を指摘することができる。

尼子晴久は、経久の時代とは異なり、播磨国以東へは拡大を図らず、有力国衆三沢氏への圧迫、直轄領の拡大、直属家臣団「富田衆」の拡充と奉行人制の整備などによって、支配体制を強化していこうとしたと考えられる。さらに、將軍の偏諱、相伴衆・8ヶ国守護職補任、叙爵、修理大夫任官など、幕府・朝廷からの栄典を求めた。制度的・経済的に基盤を固め、既存の秩序のなかから獲得できるものはできる限り獲得することによって、次々に現れる諸課題を何とか乗り切ろうとしたものと思われる。その意味においても、京都系土師器の多用は、尼子晴久権力の志向性や性格ときわめて整合的な現象であると言える。しかし、天文21年（1552）頃以降の尼子氏衰退の歴史は、基盤強化が思うような効果を

生み出さず、また地位や栄典の確保という方法では、地域権力を成り立たせることが困難な時代に入っていたことを、裏づけているように思われる（島根県古代文化センター 2013）。

したがって、16 世紀中葉において、富田周辺から貿易陶磁が急激に増加しはじめたことは、上記のような、尼子氏の拡大が富田の経済的求心性を高めたことによる西日本海を介して流入する商品・文物の増加や、京都との関係強化をも図る尼子晴久の志向性が、いずれも影響をおよぼした可能性が高いと推測される。

冒頭に触れたような、中世日本海海域における日常的で直接的な交流・物流の実態は、たしかにあまりにも断片的である。少なくとも文献史料を見る限り、大陸から海を渡った文物の主要な流れが、こうした日常的交流によるものであることを確認するのは容易ではない。関係史料が、ほとんど残されていないからである。しかし本来、希少性に依拠した遠隔地間取引には、文字に記された情報を残す必要性などなかったはずである。文献史学の枠組みを広げていくことが、最も必要な分野であると言えるかもしれない。

## 註

1. あくまでも直線距離によるものではあるが、益田―博多間は 180 km ならずであり、益田―美保関間と大差がない。益田からみた博多は、今日私たちの多くが認識している距離感よりも、はるかに近いと言わなければならない。
2. 写真に加筆した「中世富田川主要河道」は、自然地理学分野における研究成果（林・松浦 1987）を利用した推定にすぎず、当時の流路は多数分流して可変的であった可能性が高い。

## 引用・参考文献

- 網野善彦 1984 『日本中世の非農業民と天皇』 岩波書店
- 井上寛司 1986 「中世山陰における水運と都市の発達」 有光友学編『戦国期権力と地域社会』  
吉川弘文館
- 林正久・松浦和之 1987 「安来平野の地形とその形成過程」 『社会科研究』12 島根大学教育学  
部社会科教育研究室
- 井上寛司 1991 「中世西日本海地域の水運と交流」 『海と列島文化2 日本海と出雲世界』 小  
学館
- 今岡利江 2001 「山陰の中世石造物についての一考察」 『島根考古学会誌』18 島根考古学会
- 関周一 2002 『中世日朝海域史の研究』 吉川弘文館
- 松岡美幸 2002 「16世紀末期における毛利氏の石見銀山支配と鉱山社会 ―吉岡家文書を中心  
として―」 『石見銀山 石見銀山関係論集』 石見銀山歴史文献調査団
- 村上勇 2009 「地域研究と貿易陶磁・山陰」 『貿易陶磁研究』29 日本貿易陶磁研究会
- 岡村吉彦 2010 『尼子氏と戦国時代の鳥取』 鳥取県
- 河村昭一 2010 『安芸武田氏』 戒光祥出版
- 山田徹 2010 「室町領主社会の形成と武家勢力」 『ヒストリア』223 大阪歴史学会
- 渡邊誠 2012 『平安時代貿易管理制度史の研究』 思文閣出版
- 長谷川博史 2012 「毛利氏支配下における石見銀山の居住者たち」 池享・遠藤ゆり子編『産金  
村落と奥州の地域社会』 岩田書院
- 長谷川博史 2013a 「毛利元就の山陰支配」 『島根史学会会報』50 島根史学会
- 長谷川博史 2013b 『松江市ふるさと文庫15 中世水運と松江』 松江市
- 島根県古代文化センター 2013 『尼子氏の特質と興亡史に関わる比較研究』 島根県教育委員会
- 長谷川博史 2014 「戦国期の地域権力と石見銀山」 『世界遺産 石見銀山遺跡の調査研究』4  
島根県教育委員会
- 栗林文夫 2014 「『廻国通道日記』について」 『黎明館調査研究報告』第26集
- 桐山秀穂 2015 「日本出土朝鮮王朝陶磁の考古学的研究の現状」 『研究紀要』24 野村美術館
- 関周一 2015 『中世の唐物と伝来技術』 吉川弘文館
- 長谷川博史 2015 『中世山陰地域を中心とする棟札の研究』 科学研究費補助金研究成果報告書
- 本多博之 2015 『天下統一とシルバーラッシュ』 吉川弘文館

(『貿易陶磁研究』36、2016年)